

講師

吉原 悦子

■ 学歴

1. 大分大学 修士課程 卒業

■ 学位

1. 2007年 修士（看護学）

■ 研究分野

1. 老年看護学
2. 地域包括ケア
3. 聞き書きによる効果

■ 研究キーワード

1. 認知症高齢者ケア
2. 地域貢献活動
3. 実習における学生の学び

■ 研究課題

1. 実習における学生の学び
2. もしバナゲームを活用した高齢者理解について
3. 認知症高齢者がライフストーリーを語る意義—聞き書きの手法を通して—

■ 担当授業科目

1. 地域連携協働支援論（再履修）
2. 地域生活支援論（旧カリキュラム）
3. 在宅看護学
4. 在宅看護学演習
5. 看護研究
6. 高齢者支援学 I
7. 高齢者支援学 II（開講なし）
8. 早期看護学実習
9. 地域生活支援論（新カリキュラム）
10. 地域連携協働支援論（新カリキュラム）
11. 老年看護学実習 II
12. 看護学（栄養学科）（開講なし）
13. 看護総合演習
14. 看護総合実習

■ 授業を行う上で工夫した事項

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1.	<p>授業科目名【地域連携協働支援論】再履修者</p> <p>受講学生は3名であり、2年次に地域生活支援論を一度履修した学生であり、3年生科目である地域生活支援論を同時に受講している。そのため、これまでに学んできた健康、生活、地域という基本的なことをさらに深める講義内容とした。地域包括ケアに至った社会背景についてデータを見ながら解釈し、学生同士でディスカッションを行った。また、自身の住んでいる地域を概観し、課題を見出すことを課した。さらに、地域包括ケアに関連する記事について調べ学習し、自身の考えについてプレゼンテーションを行った。3人での講義であったため、質問と回答など、講義の中のやり取りが頻繁に行うことができ、単に知識の伝達ではなく教員と学生と交えディスカッションを行い、学びを深めることができた。</p>
2.	<p>授業科目名【地域生活支援論】旧カリキュラム</p> <p>本科目は、必修科目である。2年次に学ぶ「地域連携協働支援論」に次ぐ科目であり、地域で生活するあらゆるライフステージにある人々の健康を支えるため支援を学ぶ科目である。そのため、これまでに学んだ各領域の概論や方法論をベースにし、保健・医療・福祉・教育などの領域の専門職との協働連携や包括的にケアする方法、その中で看護師の役割などを講義した。</p> <p>後半の講義で「障害者・高齢者・医療的ケア児」を地域で支えるネットワークを考え、図式化した。昨年度までは個人ワークとしての課題とした。しかし、社会保障制度や介護保険サービス、さらに障害者総合支援法等、学生には難しい領域であるため、今年度は少人数でのグループワークとし、発表する時間を設け、内容を共有した。</p>
3.	<p>授業科目名【地域生活支援論】(新カリキュラム)</p> <p>新カリキュラムより、1年生後期科目として組まれており、名称変更となった科目である。これまでより具体的に落とし、できるだけ抽象的な表現は避け、講義を行った。また、必ず、講義の中で、こちらが提示した内容について考える時間や友人とディスカッションをする時間を設けた。看護は人々の暮らしを理解することが必要であるが、何気なく暮らしていることを意識し、生活や暮らし、属している集団などを振り返ることを心掛け、学生自身も生活者であることを意識づけた。また、これまでは既習の知識であった社会保障については並行で講義が行われるため、社会保障の教科書も使用して関連についても講義した。地域包括ケアシステムに関する基礎知識は理解するのが難しいため、社会的背景をできるだけ具体的に起こし、理解を進めていった。特に多様な生活様式や価値観など学生自身に問いかけながら講義を行った。</p>
4.	<p>授業科目名【地域連携協働支援論】新カリキュラム</p> <p>新カリキュラムにより、3年生前期から2年生後期の開講となり、既習の知識を確認しながら講義を進めていった。基本的な講義の組み立ては旧カリキュラムと変更はない。グループワークとしたが、ディスカッションを行うことが難しいグループなどもあり、まずは、向き合うところから始めた。今回は、個人ワークの時間であっても、近くの学生たちと話し合うことを奨励し、ワークについては講義の中でフィードバックを行った。</p>
5.	<p>授業科目名【在宅看護学】</p> <p>療養の場の移行に伴う看護と多職種連携の講義を担当した。地域包括ケアも含めて、社会的背景、制度を含めて講義した。これまで、各領域の概論や方法論で学んできたことを繰り返し想起しながら、</p>

	<p>講義を行った。また、病院、在宅など切れ目のない看護を提供することをイメージ付けるためにも具体例を挙げながら、病院から在宅、在宅から病院での継続の方法や関連職種などを含めた連携を具体的に実際のやり取りや身近な話題を組み込みながら伝えた。</p>
6	<p>授業科目名【在宅看護学演習】</p> <p>在宅看護学を踏まえながら、演習を行った。今年度は在宅看護における看護過程の特有の視点と特徴を踏まえることに重点を置き、グループワークと発表を組み合わせ、広く視点をもつことができるように講義を展開した。また、在宅看護では、あらゆる世代とその家族を対象とするため、在宅における教育や指導についてもこれまでの科目で学んだことも踏まえ、つなげて考えていけるように助言した。また、看護師だけでなく、多職種と連携する必要性や家族への視点も重要であり、特に意識して伝えた。疾患を治療することだけでなく患者さん本人と家族の可能な限り望ましい生活に近づけるための援助を柔軟に考えていけるように伝えていった。</p>
7	<p>授業科目名【看護研究】</p> <p>本講義は4名の教員で担当した。研究の基本となる講義とグループワークで科目を構成している。文献クリティークや英論文の要約など研究の基礎となる課題を行い、研究計画書の作成に取り組んだ。また、実際の調査票の作成を行うことや質的研究での分析の一連の流れを行って見た。学生にとっては、難解であった課題もあったが、学生の質問にその都度答え理解が進むように説明を行った。</p>
8	<p>授業科目名【看護総合演習・実習】</p> <p>今年度は6人の学生を担当した。友人同士のつながりが構築できておらず、まずは、交流から始めた。ディスカッションの場においても教員が介在することで、教員頼みとなる場面も多々あるため、学生のみでディスカッションを行う時間も設けた。聞き書きをテーマとし、地域在住の高齢者の人生を聞き取り、冊子を作成するという実習を行った。3人一組で受け持たせていただき、話を聞かせていただいた。学生は、対象者の人生における様々な経験や分岐点でどう考え選択したのかに触れ、それぞれの人生の多様性に気づくことができた。さらに対象者からは非常に有意義だった、人生を振り返ることができた、学生さんの役に立ってよかった、他の人にも勧めたなどの評価をいただいた。また、地域貢献活動として、地域への理解を深めることや地域で活動している企業に話を聞きに行き、見学をさせていただいた。地域での暮らしを支援するための多職種連携について、医療職のみならず、様々な職種との交流が学生の視野を広げる手助けとなった。</p>
9	<p>【老年看護学実習Ⅱ】</p> <p>3年生後期から4年生前期にかけての実習である。この実習では、これまでコロナ感染対策のため、学生の施設への立ち入りはできなかったが今年度より十分な感染対策を行い、対面での実習が可能になった。しかし、かかわる時間・人数の制限がある中で、コミュニケーションを中心に受け持ち高齢者の全体像を描くように指導を行った。特に今年度は実習日程のほとんどに祭日が入り、5日→4日の実習となった。そのため、記録物の見直しを行い、受け持ち高齢者とのかかわり、施設内での多職種の協働連携に重点を置いた。また、実習期間が短い中でも生活を豊かにする支援を実践まで行える学生もおり、対面実習での効果を実感した。認知力が低下している高齢者とのかかわりになるため、言語だけを聞くのではなく、その人の持つ背景を鑑み、受け持ち療養者さんのメッセージをくみ取るように指導した。</p>
10	<p>授業科目名【高齢者支援学Ⅰ】</p> <p>本科目は、保健福祉学部3学科合同の科目であり、アクティブシニアへの支援について、講義とPBL（事例検討）を通して検討した。本年度は、事例についてさらに精選し、情報の追加を行った。また、</p>

	発表形式をポスターセッションへと変更して行った。対面での授業で実施したため、3学科合同の特性を生かし、議論ができるように工夫した。
11	<p>授業科目名【早期看護実習】</p> <p>本年度より、基礎看護学、地域在宅看護学の領域の教員が合同で担当することとなった。そこで、これまで、病院での実習を展開していたが、幅広く看護活動の場を体験するために、病院と高齢者施設、訪問看護ステーションの2か所を体験した。さらに病院と施設の実習の間には学内日を設け、見てきたこと体験したことを整理し、次の実習施設での観察項目などを意識付けを行った。さらに、最終日学びの発表を学生のフレッシュな視点を大事にするために発表の内容を限定せず、自由なキーワードで発表してもらった。その中で、当該施設特有のものであったり、医療処置であったりについては適宜教員の説明を追加した。</p>

■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	2001年4月～現在に至る	日本看護学教育学会	
2.	2003年4月～現在に至る	日本老年看護学会	
3.	2003年4月～現在に至る	日本老年社会科学会	
4.	2006年4月～現在に至る	日本認知症ケア学会	
5.	2008年6月～現在に至る	日本看護科学学会	
6.	2016年5月～現在に至る	公益社団法人「認知症の人と家族の会」	
7.	2021年11月～現在に至る	血管看護研究会	

■ 研究業績等に関する事項（2023年度）

	発行又は 発表の年月	著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）					
1.					
2.					
3.					
（学術論文）					
1.					
2.					
3.					
（翻訳）					
1.					
2.					
3.					

(学会発表)					
1.	2023年6月	深部静脈血栓症のリスク評価と予防対策について—介護老人補完施設の調査結果を通して—	共	日本老年看護学会第28回学術集会(横浜)	①介護老人保健施設を対象とし、包括的DVT予防対策プログラム開発の資料を得た。DVT/PE既往など診療情報提供書や看護・介護要約が主であり、双方向ツールの活用は進んでいない状況が明らかになった ②共著者名：溝部昌子、吉原悦子、金子由里 ③第28回日本老年看護学会学術集会抄録集 p209
2.	2023年6月	「もしバナゲーム」を活用したカンファレンスにおける看護学生の学び	共	日本老年看護学会第28回学術集会(横浜)	①「もしバナゲーム」を活用したカンファレンスでの学生の学びを明らかにする。学生は価値観の多様性を学んでおり、生活史や人生経験を聞き取ることが対象の理解につながるとしていた。 ②共著者名：吉原悦子、溝部昌子、金子由里、北原一子 ③第28回日本老年看護学会学術集会抄録集 p205
3.					

■ 外部資金(科学研究費補助金等)導入状況(本学共同研究費を含む)

(1) 共同研究				
	研究題目	交付団体	研究者 ○代表者()内は学外者	交付決定額 (単位：円)
1.	看護師によるPOCUS活用に関する研究—DVT予防対策と安全なケアへの効果—	文部科学省科学研究費補助金基盤(B)	○溝部昌子、 <u>吉原悦子</u> 、金子由里	
2.				
3.				

(2) 個人研究				
	研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
1.				
2.				

3.				
----	--	--	--	--

■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2021年4月～現在まで	北九州市障害支援区分認定審査会	委員
2.	2023年12月	第43回日本看護科学学会学術集会	実行委員
3.	2024年2月	第4回暮らしの保健室九州フォーラム	運営委員

■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期 期 間 等	会議・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2020年4月～現在に至る	地域連携室	室員
2.	2022年4月～2023年3月	教育経費予算配分委員会	委員
3.	2022年4月～2023年3月	看護学科2年生アドバイザー	
4.	2021年4月～2023年3月	看護学科物品係	